

2017年9月20日 9月21日訂正 iii 2018年8月9日付記 9月11日付記2
9月12日付記3 12月1日 2019年2月11日補足 2月12日付記4 2月13日

4月18日微修正

『隠州視聴合記』と『改正日本輿地路程全図』における竹島の記述・描写に関する私見 補遺 4

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

本篇で、明治10年（1877）の太政官指令により、江戸時代から続く「竹島」「松島」認識が終焉し、竹島問題が次なる局面に入るのではないかという見通しを述べた。全く不勉強・力不足であるが、毒を食らわば皿まで、次なる局面の概要をとりあえずざっと眺めてみたい。

私見の大要は、明治時代に今の竹島が「松島」ではなく「りゃんこ島」と呼ばれるようになるのは、国際的な海洋認識の標準化と連動している、そしてその標準化を起動したのはイギリス海軍水路部の海図であるというものである。

アメリカ議会図書館のウェブサイトではイギリス海軍水路部の西日本及び韓国方面の海図（*Japan: Nipon, Kiusiu and Sikok, and a part of the coast of Korea*）の1855年版を見ることができる。ここには鬱陵島・竹島海域の三つの島が描かれている。名称は西から、Argonaut(P.D.), Dagelet, Hornetである。一番西のArgonautは存在が疑わしい疑存島として描かれている。この島はのちに存在していないことが判明する。この海図の1862年の改正版、1863年の改版ではArgonautにTako sima、DageletにMatu sima、HornetにLiancourtという地名が併記されるようになる【保柳1970: Fig.2, Fig.5】。これが間違いの始まりである。本来存在しないArgonautをTako simaと呼び、鬱陵島をMatu simaと呼び、竹島をLiancourtと呼ぶ名称が国際的に認知されてしまった。そして、その後、本来存在しないArgonaut=Tako simaは、地図上から消されて、欧米のアトラスではこの海域において鬱陵島をMatsu shima(地図によって綴りは微妙に異なる)、竹島をLiancourt(あるいはHornet)と描写するのが一つのパターンとなったようである（David Rumsey Historical Map Collectionのなかの各種日本図を参照。Stieler, Adolf & Petermann, A.1872. *China ... Korea und Japan*.Gotha:Justus Perthes など）。

このようなイギリス海軍水路部の海域認識を最初に日本に紹介したのが、幕末1867年に勝海舟が編纂・刊行した「大日本国沿海略図」である（横浜市立大学所蔵の古地図データベースなどで見られる）。ここでは、疑存島に「竹島」、鬱陵島に「松島」、竹島に「リエンコラルトロック」と記されている。この名称が如何にして民間に広まり、「りゃんこ島」に変容して行ったかの検討は私の手に余る。

しかし、なぜ、1862年改正版のイギリス軍水路部海図はTako sima、Matu simaという

名称を書き込むようになったのか。イギリス海軍の海図がシーボルトの日本図を参照していることは保柳睦美が指摘している[保柳 1970:32]。1840年にシーボルトが刊行した日本図 (*Karte vom Japanischen Reiche nach Originalkarten und astronomischen Beobachtungen der Japaner. -- Die Inseln Kiu Siu, Sikok und Nippon Dem Kaiserl. Leiden / 1840*. 長崎大学附属図書館長崎学デジタルアーカイブズ) において、Takasimaに Argonaute(37° 52' N.B., 129° 50' O.L.)、Matsusimaに Dagelet(37° 25' N.B., 130° 56' O.L.)と付記している。両島の描かれた位置は、Argonaute 及び Dagelet の緯度・経度情報とは異なり、赤水図の「竹島」「松島」の位置を採用しているように見える。1855年版のイギリス海軍水路部海図では、Takasima=Argonaute、Matsusima=Dagelet というシーボルトの見解は採用されず、1862年改正版に至って、Liancourt に関する情報とともに海図に盛り込まれたものであろう(ただし、名称の情報のみを採用したものであって、島の位置に関しては従来の欧米航海者の水路情報が使用された)。なお、1855年に山路諧孝らが編纂した『重訂万国全図』(岡山大学池田家文庫絵図公開データベースシステム、国会図書館デジタルコレクション、筑波大学附属図書館「古地図の世界」電子展示)が、疑存島に「アルゴナウト島即竹島」、鬱陵島に「タゲレト島即松島」と書き込んでいる。これもシーボルトの地図の情報に基づくものであろうか。

保柳睦美. 1970. 「伊能図に基づいたイギリス製日本沿海図」『地学雑誌』79 - 4.

菊池真一. 2007. 「幕末から明治初年にかけての日本近海英国海図」『海洋情報部研究報告(海上保安庁)』43.

補足

John Thomson のアトラスに載せられた *Corea(sic) and Japan* の地図(1815年)に夙に Argonaut と Dagelet の2島が描かれている。この地図は、Library of Congress 及び David Rumsey Historical Map Collection で見ることができる。

ちなみに、Library of Congress のサイトで maps>japan を検索すると19世紀段階に欧米で刊行された日本図を多数見ることができるが、それらの地図において日本列島の西側の海域が Japan sea あるいは Sea of Japan あるいは Japanisches Mere と記されていることを容易に確認できて便利である。

なお、世界各国の古地図の「日本海」表記については外務省の詳細な調査があるので、是非参照されたい。

https://www.mofa.go.jp/mofaj/a_o/na/page1w_000153.html

ついでの話。日本の地図における「日本海」表記で最古のものは、山村才助(1770-1807)の『華夷一覽

図』のようであるが、柴田（新発田）収蔵が1852年に刊行した『新訂坤輿略全圖』（あるいは制作に参加した『重訂万国全図』1855年）に「日本海」と記していることも私には興味深い。柴田収蔵は佐渡出身の洋学者・地理学者である。勉強の過程で自らを育んだ海域を外国の地図が「日本海」と呼んでいることに気づいてきつと感激したに違いない。

付記

『海舟日記』の慶應三年（1867）十一月十六日条に「日本沿海図出来につき、閣参に献ず。」とある[勝部・松本・大口編 1972: 435]。海舟は1866年には長州戦争の後始末に苦勞し、1868年には西郷隆盛との談判により江戸城無血開城を果たすことになるが、その間の1866年には幕府の海軍伝習掛を勤め、イギリス人教官との実務的交渉や伝習の準備に明け暮れた[大口 2013: 64-66]。『海舟日記』の記述から、同年、海舟が日本周囲の測量に意を払い、英米士官と情報交換をしている様子が窺える[勝部・松本・大口編 1972: 417, 425, 426, 430, 438]。

勝部真長・松本三之介・大口勇次郎編. 1972. 『勝海舟全集 18 海舟日記1』東京：勁草書房.

大口勇次郎. 2013. 『勝小吉と勝海舟：「父子鷹」の明治維新』東京：山川出版社（日本史リブレット066）.

付記2

蔵原清人氏の論考に戸倉伊八郎が元治2年（1865）に刊行した『日本地図』が紹介されている[蔵原 2000: 38-39; 2010: 348-349]。金沢の近広堂の出版である。地図の写真が掲載されているが、細部は明らかではない。地図上の竹島・鬱陵島海域を見ると、そこには二つの島が描かれているようである。赤水図系でなく欧米の地図の影響を受けていることだけは確かなようであるが、それ以上の考察は現物を見ないと無理である。今後の課題である。

戸倉伊八郎なる人物が何故このような日本地図を金沢で出版することになったかについて、蔵原氏の論考によりながら紹介しておきたい。戸倉伊八郎は、長州藩の出身で長州の軍艦建設のために勝海舟と同じく長崎海軍伝習所で航海・測量学や数学を学び、その後江戸に出て村田蔵六や高島秋帆のもとで学ぶ。長州で尊皇攘夷の動きが激しくなり、洋学者の立場が危うくなると、ちょうど加賀藩が軍艦を購入し軍艦所を設け航海術の講師を必要としていたことから、これに応じ金沢に移り、1862年から66年まで航海術や数学を教授することになった。この間に上記の地図を著し出版したということである。

金沢における幕末維新の洋学関連の出版に関して特筆すべきことがあり、それには戸倉伊八郎も関係している。明治に入り算数・数学は従来の和算から洋算に切り替えられるが、

初期の代表的な教科書として、塚本明毅『筆算訓蒙』（明治2年、塚本も長崎海軍伝習所で学んでいる）、橋爪貫一『洋算独学』（明治4年）、関口開『新撰数学』（明治6年）が挙げられる[小倉 1939: 291-296]。そのうち関口は金沢の人であり、元来和算の教師であったが、戸倉に洋算の初歩を教えられ洋算の意義に目覚め、独学で洋算を探究し多くの洋算関係の著作を残している。関口は戸倉と衝突し破門されるのであるが、戸倉との出会いがなかったら洋算に転向することは無かったと考えられている。関口の代表的著作である『新撰数学』は明治9年（6版）まで出版され、総計22万部を販売した。当時の大ベストセラーが金沢で出版されていたということである。このような金沢の知識人・出版人の知的水準の高さが、戸倉伊八郎の新しい日本地図の出版の背景にあったと見てよかろう（もともと加賀藩が「算術」を重視する「藩風」であったことについては[磯田 2010(2003)]）。

磯田道史.2010(2003).『武士の家計簿：「加賀藩御算用者」の幕末維新』東京：新潮社（新潮新書、キンドル版）。

小倉金之助. 1932.『数学教育史』東京：岩波書店。

蔵原清人. 2000.「金沢に洋算を伝えた戸倉伊八郎」『市史かなざわ』6.

蔵原清人. 2010.「金沢に洋算を伝えた戸倉伊八郎」高木靖文編『近世日本における「学び」の時間と空間』広島：溪水社。（上記論文の増補改訂版であるが、地図の印影は省略されている）

明治初期の洋算教科書の著者として名前を挙げた橋爪貫一は、幕末維新に洋学関係の様々なテーマに関して啓蒙書を多数著した人物である[関場 1993]。しかも洋学関係だけではなく、日本の国土や歴史に関する入門書も著している。橋爪貫一『童蒙必読：州名之巻』（明治5年、国会図書館デジタルコレクション）の冒頭に「大日本國略全図」が載せられている。その竹島・鬱陵島海域の描き方を見ると、位置は少しずれているのであるが、赤水図系の竹島・松島が描かれている。

関場武. 1993.「「佛語自在」、「九體伊呂波」、「國盡」：橋爪貫一の洋学入門書」『藝文研究』63.

付記3

明治大学図書館蘆田文庫ホームページに戸倉伊八郎『日本地図』の解題が載せられ、「格爾屯氏日本図に酷似する図」という秋岡武次郎氏の説が引かれている（出典未調査）。

http://www.lib.meiji.ac.jp/perl/ashida/search_detail?detail_sea_param=years,9,94,0

「格爾屯氏日本図」は「横浜市立大学所蔵の古地図データベース」で見ることができる。

http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~ycu-rare/pages/W290_166.html

その書誌情報によれば、この地図は『格爾屯氏万国図誌』のなかの日本図であり、文久2年（1862）に江戸（駿台桜蔵版）で刊行されたもので、作者については、佐波銀次郎訳、手塚律蔵校とある。上記の蔵原氏の論文によれば、手塚律蔵は長州藩出身の洋学者で江戸で塾を開いており、戸倉は手塚のもとでも学んでいた。手塚は加賀藩の砲術教授に携わっていた[蔵原 2000: 36-37]。とすれば、戸倉が金沢で刊行した『日本地図』が「格爾屯氏日本図」に似ていても不思議はない。

「格爾屯氏日本図」上の竹島・鬱陵島海域を見ると、鬱陵島と疑存島が描かれており、鬱陵島には「マツシマ（ダゲレット）島」、疑存島には「タカシマ アルゴナムテ島」と記されている。1860年代には洋学者を中心に赤水図系とは異なる日本海海域の認識が広まりつつあったのかもしれない。

静岡県立中央図書館蔵文庫には、Richard S. Fisher. 1860. *Colton's general atlas, with descriptions*. New York が蔵されており、その画像がデジタルライブラリーで紹介されている。その書誌情報によると、印記として「開成所、静岡学校」と記されているとのことである。『格爾屯氏万国図誌』はこのアトラスの解説部分と日本図を翻訳したものではないかと思われる。その日本図では、鬱陵島には Matsu sima I.Dagelet、疑存島には Taka sima I.Argonaute と記されている。

このアトラスに先立ち、G.W.Colton が 1856 年に刊行したアトラス (*Colton's Atlas of the World*. New York: J.H.Colton and co.) があり、古地図商 (WardMaps LLC) のウェブサイトでその画像を見ることができる。

<http://www.wardmaps.com/viewasset.php?aid=5854>

<http://www.wardmaps.com/viewasset.php?aid=7590> (日本図)

2018年9月12日閲覧

この日本図でも、鬱陵島には Matsu sima I.Dagelet、疑存島には Taka sima I.Argonaute と記されている。1856年以降の Colton 系のアトラスが、Takasima=Argonaute、Matusima=Dagelet というシーボルトの見解を採用し、その後の海図・水路誌に影響を与えた可能性も考えられよう。

1858年にパリで発行された『水路年報』15には下記のような記述が見られ、Matsu-sima ou Dagelet、Liancourt (Hornet)、Tako-sima ou île Argonaute を la mer du Japan の小島として併記している。イギリス海軍水路部海図 1862 年改正版は、Tako-sima という表記も含めて、この記述に依拠しているのかもしれない。

Les seules îles et dangers signalés jusqu'à présent dans le milieu de la mer du Japan sont:

L'île Matsu-sima ou Dagelet, située par latitude N. 37.30, longitude 128.33 E. (Roquemanurel); c'est une grosse masse de rochers escarpés, élevée de 1262 mètres et que l'on peut voir à une distance de plus de 45 milles avec un temps clair; sa partie Nord présente un morne incliné sous forme de corne très-remarquable.

Rochers Liancourt (Hornet) - Ces îlots, situés par latitude N. 37.14, longitude E. 129.35, ont été vus par le *Liancourt*, le 27 janvier 1849, et par une division anglaise, le 25 avril 1855. Ce sont des rochers arides qui ont environ 1 mille d'étendue du N.O.q.O au S.E.q.E., et qui gisent à 1/4 de mille de distance environ l'un de l'autre; ils paraissent réunis ensemble par un réctif. Le plus à l'O. a 124 mètres d'élévation environ; sa forme est celle d'un pain de sucre, et il est le plus haut. Le plus à l'E. est plat au sommet et plus bas. Il paraissait y avoir du fond auprès de ces îlots, mais ils sont dangereux par leur position, car ils gisent sur la route des bâtiments qui traversent la mer du Japon pour aller à Hakodaki.

Tako-sima ou île Argonaute - Cette île, portrée douteuse sur les cartes, n'exite pas dans la position qui lui a été assignée, latitude N.37.52, longitude E. 127.33. En 1852, la *Capricieuse* passait deux fois sur cette position sans apercevoir aucune apparence de terre.

Annales hydrographiques. tome quinzième. Paris: Imprimerie administrative de Paul Dupont. Année 1858. p180.

(google books – The Pennsylvania State University Libraries)

ちなみにこの記事は「日本海」について次のように記している。

Le MER DU JAPON est limitée à l'O. par la côte de Corée, au N.O. par la côte de Tartarie, et par les îles du Japon à l'E. et au Sud. Elle a environ 600 milles de largeur de l'E. à l'O. dans la partie où elle est la plus étendue, et une longueur de 900 milles environ du S.S.O. au N.N.E. jusqu'à la manche de

Tartarie, long bras de mer étroit par lequel elle donne dans la mer d'Ochhotsk.

*Ibid.*p178